フィールド（現場）からの風 ㊶

宮田守男

地域農業を守るには、いかに販売できるかが問われている

9月下旬、全国農業協同組合中央会の中屋徹会長が共同通信のインタビューで新型コロナウイルスの影響について「飲食店の休業や外食自粛で、予想以上に主食用米の需要が減っている」と話す。既に2020年産米20万㌧程度の販売を、来年秋以降に先送りすると方針を明らかにしたばかりだ。食の多様化により、年々需要は減り、現在は年710万㌧の需要しか見込めず、在庫が積み上がるのは避けられないだろう。来年以降も非常に不透明で、米価の値下がりを防ぐために、作付面積を大幅に減少しなくてはならないのだろう。

だが政府は、18年度産米からコメの生産調整を廃止。需要に応じて農家が自由に稲作に取組める状況だ。値下がりをする状況の中、コメ作りをやめる農家が多数でるのか心配になる。コメがだめなら野菜などを栽培、と考えやすいのだが、地域の購買力は季節間の変動が大きい。白馬地域では、圃場整備が急ピッチで進められ、畑作面積も大幅に増える見込みだ。地域で何を栽培するかの論議の前に、農家が生産した農産物を、どの様に販売して行くのか、の視点が今求められている。

既に大町地域では、主食米の海外販路拡大への取り組みが効果を見せ、日本酒などの海外輸出にも期待が寄せられている。「将来の農産物販売」を農家やJAや行政や民間業者と危機感を共有する事が今求められている。

年を取ると覚えていることより忘れてしまう事が多くなってきた。ある人の顔や職業は思い出せるのに、名前が出てこない。パン屋（ベイカー）のベイカーさんの職業は思い出せるが、名前が出てこない。という笑い話から「ベイカー・ベイカー・パラドックス」と呼ばれるのだそうだ。文章をつづるとき、使う漢字、読むことはできるが書こうとすると思い出せない。電子機器を利用すれば、難しい漢字を使った文章の作成は容易だが、手書きの執筆が減った分、記憶力の低下も著しいこの頃だ。国立がん研究センターなどの研究では、コーヒーを飲む量の違いで心臓や脳血管、呼吸器の病気に差が出ると発表している。コーヒー豆の取引は国際協定により、多くの国で10月から新しい1年に入り、1日以降に収穫した豆は「ニュークロップ」と呼ばれている。秋を感じながら「コーヒー」を味わうのも面白いのかもしれない。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

9月下旬、気まぐれな天候に悩まされるが、野菜の対応力には驚かされる。